

## 4-1-6-2 内視鏡科

### 1. 概要

内視鏡科の人員は医長1名であったが、2005年10月31日をもって退職した。現在は非常勤医師として消化器内視鏡検査を施行し、疾患の診断ならびに治療を行っている。施行可能な内視鏡的治療として、これまでと同様に食道・胃静脈瘤の硬化療法ならびに結紮療法、消化管狭窄に対する拡張術、異物摘出術、腫瘍性病変の粘膜切除術ならびにポリペクトミー、消化管出血に対する止血術(局注法およびクリッピング)、総胆管結石除去術および胆道ドレナージ、経皮的内視鏡下胃瘻造設術、食道アカラシアに対する専用拡張バルーンなどが挙げられる。

### 2. 診療活動

2004年4月から2005年3月までの消化器内視鏡検査総数は259件(昨年度270件)であった。(外科単独での施行例を含む。)このうち上部消化管検査(内視鏡的逆行性膵胆管造影・術中胆道鏡を含む)は188件(昨年度212件)、下部消化管検査は71件(昨年度58件)であり、昨年度に比して上部消化管検査の件数が若干減少し、下部消化管検査が若干増加した。

月ごとの検査件数の推移をみると、昨年度と同様に夏から秋(7~10月)に多く、これに春が続く傾向が見られたが、やはり学生の休暇に一致するものと考えられた。

内視鏡的治療では食道静脈瘤の結紮術、食道狭窄拡張術、胃ポリープ切除術、大腸ポリープ切除術、胃瘻造設術、下部消化管止血術をそれぞれ施行した。

過去2年間と同様に、10歳程度の患者であれば、鎮静を用いなくてもスムーズに検査を受けることが出来た。上部および下部内視鏡検査ともに、10歳以上の年齢であり、かつ検査の必要性を理解できる患者であれば、成人と同様に通常の内視鏡室での検査が可能であることが確認された。

検査の介助を担当する看護師には若干の異動があったが、前任者からの引継ぎと症例経験の積み重ねにより、内視鏡検査・各種手技に関する知識および内視鏡検査を受ける患者に対する心理的サポートがともに向上し、現時点で通常の実施を行うに際して問題のない状況にある。

